

S・アレンさん（五十九歳）夫妻であった。

今を去る三十余年前に彼はアメリカ陸軍の兵士であったが、太平洋戦争で日本軍の捕虜となり、この同和小坂鉦山で坑内のレール敷設の重労働をさせられていた。

当時は非常に食糧難で、日本人ですら食糧に困っていた。小坂町周辺は荒地で鉦山の汚染などで耕地も少なく、遠く盛岡地方まで買出しに行く有様であった。同じ工作課に勤務していた畠山功さんは、アレンさんらの重労働と粗食の苦しい生活に同情をよせていた。二人の関係はしだいにお互いの立場を超越して友情が芽ばえたのであった。

人目を忍んで、フキやミズなどの山菜やら、時には大豆入りのおにぎりなど少しずつアレンさんに与えていた。時にはトイレの中で与えたこともあったという。この二人の友情は終戦まで続いた。

戦時中、捕虜は氏名を呼ばず番号で呼ばれていた。彼の番号は31番であった。終戦一日たってB29が小坂上空に飛来し、パラシュートで捕虜あてに食糧、衣類、薬品などが投下された。アレンさんは別れの折、労働時に使用していた汗と涙のこもった31番と記入されているカーキ色のタオルに、米軍の投下した食糧の一部を包み、そっと畠山さんに感謝の気持ちとして差し上げた。その折、アレンさんはチューインガム

## 三十三年振り涙の再会

東京国際大会に参加した

あるロータリアンの友情

大館北 木暮 雅

東京国際大会を前にした五月十三日、秋田県も青森県に近い鉦山で有名な小坂町に二人のアメリカ人が訪れた。アメリカ、カンザス州で弁護士を開業しているロータリアン、ウイリアム

▼病床のミサオさんを見舞うアレンさん夫妻



の包み紙に畠山さんの住所、氏名を書いてもらい、この次にお会いする時は平和な時代でありますように、と祈るような気持ちで別れたという。だが、畠山功さんは六年前に交通事故で他界した。

アレンさんは、今度の東京国際大会への出席を機会に夫人同伴で小坂へ来たのであった。文通により功さんの死去は知っていたが、一目でよいから奥さんのミサオさんや家族の方々にお礼を申し上げ、功さんのご冥福を祈りたいと、

また夫人も主人の思い出の地へ行って、主人と共に感謝の意を述べたい気持ちであった。ミサオさんは六ヵ月前から眼病のため大館市立病院で加療中であったが、病床を見舞い、お互いに手を取り合って感泣したという。

畠山さんは三十三年間もの長い間、アレンさんの残した31番と書かれたタオルを保存し、アレンさんはチューインガムに書かれた住所をお互いに見せあった。畠山さん家族もアレンさん思わず男泣きに泣いたという。

これを聞いた人達は、戦時下に捕虜と日本人がお互いに恩讎を超えた友情に深い感動を覚えた。アレンさん夫妻は翌日、国際大会に参加するべく大館駅を去った。

東京国際大会の陰に、このような美談があったことを全国のロータリアンにお知らせしたい。アレンさんは今、カンザスで、ロータリー発展に尽力されている事と存じます。彼こそロータリアンの鑑といえます。

(秋田県・歯科医)